

原発事故により放牧休止に追い込まれた森林ノ牧場の現状 と今後

誌名	畜産の研究 = Animal-husbandry
ISSN	00093874
著者名	山川,将弘 佐藤,みゆき
発行元	養賢堂
巻/号	66巻1号
掲載ページ	p. 54-56
発行年月	2012年1月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



原発事故により放牧休止に追い込まれた 森林ノ牧場の現状と今後

山川将弘*・佐藤みゆき**

1. 森林ノ牧場の概要説明

日本は国土の約7割を森林で占める森林大国である。しかし、国内で使用される木材製品のほとんどを輸入に依存しているため、わが国の森林の大部分は活用されることなく管理不十分で、中山間地集落とともに荒廃している。そのような森林を持続的に活用すべく、日本でも有数の酪農地帯でありながら、観光地や避暑地としても有名な栃木県那須町に2009年7月、森林ノ牧場が誕生した。

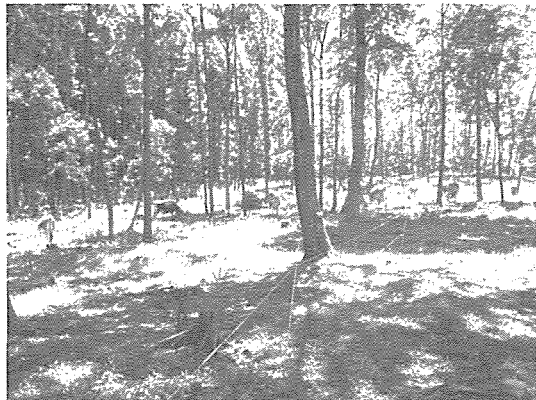


写真1 地震前の様子

* 森林ノ牧場 (Masahiro Yamakawa)

**中洞牧場 獣医師 (Miyuki Sato)

森の中に牛を放すと、牛は森林の中で生える下草を食べ始める。牛が下草を食むことで森は開拓され、明るくなった森林には人が容易に入ることができるようになる。要するに、本来人が管理するはずの下草を牛に処理させることで、大幅に労力とコストを低減させることが可能になる。しかし、木材の生産には木を植えてから成長するまで何十年という長期的な管理が必要となり、その間収益を生み出すことは困難である。そこで、えるまでに時間のかかる長期的な収益に、乳製品の販売という短期的かつ持続的な収益を合わせることで、森林ノ牧場は森林空間に事業を作り出すことを可能にする、いわば中山間地再興のモデル事業である。

森林ノ牧場は森に放牧されたジャージー牛から高品質な乳製品を作り出すことができるので、牛乳、アイス、ソフトクリームなどの製造・販売でこれまで順調に売上を伸ばしてきた。さらに、開拓された森林を自然教育の場やレクリエーションの場として活用していく構想もある。

この森林ノ牧場は、アマタ株式会社の一事業からスタートした。アマタ株式会社は資源再生の事業をメインとし、循環型社会の構築を目指す会社で、「価値のなくなったものに価値を与える」という事業を手がけてきた。国内の森林の7割が手つかずであるということに着眼し、その価値を見出し事業にしたのが森林ノ牧場である。固定客も順調に増え、2011年4月にはアマタから独立し、9名の従業員で新たにスタートを切る予定であった。

2. 東日本大震災の被害、そして休業

2011年4月、森林ノ牧場はアマタ株式会社の事業から独立し森林ノ牧場株式会社となった。しかし、その直前の3月11日にあの巨大地震が、新たなスタートを待ち構えていた牧場を襲うことになる。

牧場周辺でも震度6弱を記録し、大きな揺れで牧場内のカフェでは仕器が壊れ、火のついた薪ストーブも倒れ、プラントでも製造ラインがゆがんだ。しかし、それよりも大きな打撃を与えたのが福島第一原子力発電所の事故であった。

森林ノ牧場は福島第一原発から約90kmの場所にあり、原発事故の後には、牧場のある那須町にも牛の放牧を禁止する通達が出されてしまった。年間昼夜放牧を看板に牛を飼育していた森林ノ牧場には牛舎がなく、このまま牛を放牧し続けるわけにもいかなかった。牛を避難させるにも、どの農家も震災の影響を受け、牛を預かってくれる状況ではない。受け入れ先を探すにも、どこも放牧ができないので牛舎の過密が予想され、自給飼料生産も可能かどうか不透明な状態であった。さらには、原発の被害地域の牛を他の地域では引き取ってくれないのではという不安もあった。放牧再開のめどは立たず、乳製品を製造することもできないまま、ただただ原乳を廃棄するだけで時間は過ぎていく。4月から独立し新体制に移行するにも、4月以降の販売については全くメドが立たず、また雇用の継続も困難になるため、いよいよ完全休業の選択も考えざるをえない苦汁の選択が迫っていた。

3. 牛の移動と営業の再開

原乳の廃棄が続く中、一縷の望みだけを胸に牛を避難させる場所を探していたところ、那須どうぶつ王国の紹介により、那須大谷地区で酪農経営をする佐久間牧場という受け入れ先を見つけることができた。震災より約1ヶ月半の長い経過を経て4月29日、牛を無事避難させることができた。

牛を避難させた佐久間牧場が森林ノ牧場から近い距離であったこと、牛たちがバラバラにならずに全頭同じ場所に避難できたことなど運も重なり、乳製品の製造再開までこぎつけることもできた。

4. 営業再開後の状況

製造は再開できたが原発事故による風評被害の影響は大きく、売上は低迷し事業計画も当初の売上の1/4程度に縮小せざるをえなかった。放牧だから購入するという消費者が多かったことに加えて放射能汚染の風評被害もあって取引先も減り、当初雇用するはずだったスタッフも最小限の人数しか雇えず、最低ラインでのスタートとなった。

放牧を売りにブランド化していた「森林ノ牛乳」は販売を休止せざるをえず、定期的な製品の放射能検査も当然のことながら欠かせない。

2011年10月現在、牧場に放牧しているのは育成牛のみで、放牧地の草は伸び放題のまま。当初の理想とはだいぶかけ離れた現実をつきつけられた思いだった。



写真2 地震後の様子

5. 新たな取り組み

そのような折、森林ノ牧場の再開を願って声を上げてくれたのが、高齢者専用賃貸住宅のゆいまーる那須の居住者と、障がい者を雇用しているNTTデータいちのメンバーだった。牧場に隣接するゆいまーる那須に住む高齢者にとって、森林ノ牧場の牛とその乳製品、カフェは生活の一部となっており、再開に向けて何か手伝えることがないかと名乗りを上げてくれた。また、以前から働いていたNTTデータいちのメンバーにとっても、牧場は大切な職場。障害者の方の仕事を継続させるため、牧場の再開に向けてゆいまーるの居住者と共に、協力する体制を敷いてくれた。今回の震災によって、ゆいまーる

那須, NTT データだいち, そして森林ノ牧場がこれまで以上の強い絆を結び, 牧場の再開に向けていよいよ動き出すことになる。

まず, 始まったのが育成牛の管理。乳牛は全て佐久間牧場へと避難したが, 一部の育成牛は牧場に残っていたため, 毎日の餌やりや糞掃除をゆいまーの居住者と NTT データだいちのメンバーが担当してくれることになった。

次に進めたのが, カフェ前の菜園の整備。カフェ再開に向けて菜園を整備しておきたいことに加えて, ゆいまーの居住者の生活の充実のため, 菜園には野菜も植えられた。そして, カフェの運営に関しても, ゆいまーの居住者から積極的に手伝いたいとの声があがり, 現在では3者協力体制のもと, カフェの再開にこぎつけることもできた。

佐久間牧場とも牛の預託だけではなく, 協力して地域イベントを開催するなど, よい関係性を築くことができた。

このほかにも, 那須地域内はもとより, 隣接する福島県の西郷村や白河市といった地域との連携も次第にできつつある。

このように, 森林ノ牧場は多くの人たちの支えと協力によって再開にこぎつけることができた。

6. 現在そして未来

カフェが再開し, 多くの人たちの応援や支えもあって取引先も徐々に戻りつつある。多くの人達の期待にこたえるためにも, 放牧の再開は大きな目標である。2012年春の再開を目指して準備を進めている。現在では土壌や草地の放射性物質検査を実施しており, 今後は除染作業も実施していく予定だ。まずは範囲を限定しての除染作業を実施し, ゆくゆくは徐々に範囲を広げて放牧地全域での除染作業も検討している。



写真3 再開した森林ノ牧場カフェにて

放牧が再開できたら, やはり「森林ノ牛乳」を販売していきたい。そして雇用を予定していた従業員を呼び寄せ, 当初の事業が行える段階までもっていききたい。

「震災がなければ…」と思うことはたびたびある。けれども, 本来掲げていた事業の主旨をあきらめざるをえない状況でも, 何度も苦渋の決断を強いられても, こうして続けてこられたのは, 沢山の人たちの励ましや支えがあったからだ。たとえ今は本来の事業ができなくても, 森林ノ牧場という理念に賛同し, その価値を認めて心からその再開を願っている人たちがたくさんいる。

牛乳の生産が酪農のメインではあるが, 牛たちがいる環境, 山の中の環境, そして牛と人, 人と人とのつながりこそが森林ノ牧場の価値。今回の震災を通して多くの人たちへの感謝を胸に刻み, 我々の牧場から発するメッセージで, 沢山の人の笑顔にし, 勇気づけられるよう前に進んでいきたい。そして, 再び多くの人が集まり, 人と自然が結びつき, 人と人がつながる牧場にしていきたい。